

勲章と1939年「伯林日本古美術展覧会」

— 丸尾彰三郎の遺品・勲章に注目して —

安 松 みゆき

【要 旨】

日本の彫刻史家の丸尾彰三郎の遺族より遺品の提供を受けた。その中から勲章に注目して、1939年ドイツでの「伯林日本古美術展覧会」の政治性を改めて検討した。その結果、勲章の受賞者には日本側とドイツ側に乖離があり、日本の美術関係者の多くがドイツ側から勲章を授与されていた。改めてこの展覧会におけるドイツ側の政治的な意義を確認し得た。

【キーワード】

丸尾彰三郎 ヒトラーからの勲章 伯林日本古美術展覧会
リヒャルト・クライン ドイツ鷲騎士団功勞勲章

はじめに

丸尾彰三郎(1892-1980) [図1]は近代の日本彫刻史家であり、国宝監査官として活躍した。今回丸尾彰三郎の遺族の佐倉瑞樹氏より遺品の提供を受けた。貴重な一次史料である遺品から見出せることは何かという問いに対して、本稿では丸尾彰三郎の遺品の中から勲章に注目することで、1939(昭和14)年にドイツで開催された「伯林日本古美術展覧会」が、ドイツ側の政治的意義を持つものとして評価されたことを裏付ける検討を試みる。



図1 《丸尾彰三郎》
昭和16年頃
個人蔵・筆者撮影

1 問題提起と既往の研究

丸尾彰三郎と「伯林日本古美術展覧会」について簡単に概説する。まず丸尾彰三郎についてだが、1892(明治25)年に岡山に生まれ、27歳で東京帝国大学美学美術史学科を卒業した2年後に文部省図書館員教習所講師などに就任し、1932(昭和7)年から14年間、文部省国宝監査官となった。戦後には文部省社会教育局に勤務し、国宝調査嘱託、国立博物館調査員を経て1950(昭和25)年から退官するまでの6年間は文化財保護委員会事務局美術工芸課で働いた。このように文部省古社寺保存計画調査嘱託に就任して、まだ草創期にあった日本全国の社寺の古彫刻を主とする文化財の調査と基礎的研究を実施したことに高い評価が与えられ

ている¹。

つぎに「伯林日本古美術展覧会」について説明する²。1939年2月末からおよそ1か月間ベルリンで開催されたのが「伯林日本古美術展覧会」である。この展覧会は長らく本物の日本美術を見たいと希求したドイツ側の意向からはじまって、第三帝国の時期に実現した。展示作品は日本美術の歴史を体系的に示す流れで選択され、さらに質にこだわり、御物、当時の国宝および重要美術品が全体の3分の2を占めるほどの作品が出陳された。たとえば、法隆寺蔵《観音菩薩立像》（当時国宝、現在重要文化財）、観智院蔵《閻魔天像》（当時国宝）、細川護立蔵《長谷雄草子》（当時国宝、現在重要文化財）、雪舟筆《秋冬山水図》（当時より国宝）、《厩図》御物、宗達筆《舞楽図》（当時国宝、現在重要文化財）などである³。これだけの質の高い作品によって日本美術の歴史を振り返る展覧会を計画し、しかも第二次世界大戦開戦6ヶ月前に、実際にすべて日本からドイツに持ち込んで展示しており、歴史的にも稀有な展覧会となった。

この展覧会については、これほどの質と、戦争間際の状況下の展覧会として、あるいは文化交流の事業としても注目されるべきだが、ナチスとの関係で長らく忘却されてきていた。筆者はその研究状況に一石を投じるかたちで研究を続けてきた⁴。その結果、展覧会への関心が広まったようで、ドイツ語のwikipediaで展覧会の項目が設けられて紹介されている⁵。また日本での関心は、特に雪村筆《風濤図》がきっかけとなって同展が注目されてきている。というのは、ヒトラーがその作品を高く評価したことによる。

本稿の問題提起も、雪村筆《風濤図》が契機となる。上記のように「伯林日本古美術展覧会」では、期間中に日本側は飛び抜けて質の高い作品群の展示によって、最高の評価を得ることを期待していた。特にヒトラーの日本文化への低い認識を知っていた日本側としては、その認識の改善を求めていたのである。それはヒトラーによる雪村筆《風濤図》称賛に具体化したことは別紙で述べたとおりである⁶。

ではそうした意味からすると、一方のドイツ側では何を求めていたと言えるのだろうか。その答えが今回の丸尾の遺品である勲章から明確に導き出せる。すなわち、「伯林日本古美術展覧会」を文化交流でなく、政治的な意味で評価したということである。これまでのヒトラーの対応を見ても、当時のドイツ側ではヒトラーの日本美術に対する評価が取り上げられることはほとんどなかったため、今回の検討から導き出される結果は、すでにある程度想起されるものだが、今回はそれを明確に裏付けることに主眼がある。勲章はすでに言われているように政治的プロパガンダの役割を担っていたからである。

従来の研究として、勲章についてはwikipediaや佐藤正紀氏の『勲章と褒賞 この一冊で、すべてがわかる』に見られるように、勲章を概説するものが一般的である⁷。ドイツの勲章についてもそうした紹介のなかで見出せる一方、拓殖久慶氏の『ヒトラー時代のデザイン』など、ナチス関連を工芸的な側面から紹介する対象としても取り上げられている。また草森紳一氏の『絶対の宣伝 ナチス・プロパガンダ3 煽動の方法』では、ナチスの本質をプロパガンダから探るなかで、勲章は象徴的な意味で取り上げられており、好例としてあげられるのは、ゲーリングが勲章を特別に身につけていたのに対してヒトラーはほとんどつけていなかったことである⁸。そうしたなかで注目されるのが、後藤謙治氏による『ヒトラーと鉄十字章—シンボルによる民衆の煽動—』⁹と、小川賢治氏による『勲章の社会学』である。前者では勲章の詳細な概説の上に、ヒトラーがデザインした勲章なども取り上げて、プロパガンダとして利用されたことを述べたものである。勲章については、デザインの担当者がヒトラーとする指摘がなされているが、参考文献や裏付けがないため、残念ながら曖昧な理解にとどまっている¹⁰。後者は、日本と主要国の勲章の政治的社会的な意味を分析した学術的論考であり、ドイツについても述べられている。小川

氏によると、ナチスは栄典を大々的に利用したと言う。戦後の見解において、勲章そのものが、ナチスの国家体制と総統の権力のために作成されたとの指摘が見られる¹¹。ただし、それを具体的な事例をもとに検討して指摘しているわけではなく、さらに1939年の「伯林日本古美術展覧会」との関係での勲章の検討はなされていない。したがってこうした従来の研究状況を踏まえつつ、本稿では、勲章を考察のキーワードに据えて、1939年の「伯林日本古美術展覧会」での関係者の多くが勲章を授与されたことを新たに提示し、ドイツ側の同展への評価とその意義を改めて勲章から裏付けたい。

2 丸尾彰三郎の勲章授与をめぐる

2. 1. 丸尾彰三郎の叙勲 [図2, 3]

丸尾彰三郎の遺品のなかには勲章が含まれていた。それは、展覧会開催から9ヶ月後の1939年12月22日付でドイツ政府より授与された「Verdienstkreuz des Ordens vom Deutschen Adler Erste Stufe ドイツ鷲騎士団功労勲章一等」である。今回遺族からは、授与された勲章の他、ヒトラーのサインの入った勲記 [図3] と授与書、そして日本側からの外国勲提用免許証の提供を受けた。

ではヒトラーからの勲記について見てみよう。勲記には次のように書かれている。

ドイツ帝国の名のもとに丸尾彰三郎氏に、「das Verdienstkreuz des Ordens vom Deutschen Adler erster Stufe ドイツ鷲騎士団功労勲章 一等」を授ける。

ベルリン 1939年9月13日 ドイツ帝国首相
ヒトラーの自筆サイン

Chef des Ordenskanzlei 騎士団官房長官
O Meissner マイスナー、マイスナーの自筆サイン

この勲章は十字軍を起源とするものとされ¹²、後述するように5等級に分類された点からすると上から3番目にあたる。勲記の他に、ドイツ鷲騎士団功労勲章の条例と法令の書かれたものが渡されている。そこには、勲章の授与の目的、勲章の種類、勲章を身につける方法などが書かれている。授与の目的とは、「ドイツの鷲の勲章は、外国籍を持ち、ドイツ帝国のために貢献したことへの榮譽として与えられる。これは外務省からの提案に基づいて、総統とドイツ国首相から授与される」と言う。

丸尾彰三郎の勲章について、日本側からの、外国よりの勲章授与に関する受勲事由書が残されていることが、アジア歴史資料センターのデータベースから見出せた¹³。それによると、丸尾彰三郎の場合には9月13日付で授与されており、授与の理由は、昭和14年3月に開催されたベルリンの「伯林日本古美術展覧会」で、貴重な美術品を護持して展示するなど、展示に尽力したことを功績として把握されたことによる¹⁴。日本側の受勲事由書には、ドイツ側よりも明確に「伯林日



図2 丸尾に与えられた
《ドイツ鷲騎士団功
労勲章一等》
個人蔵・筆者撮影

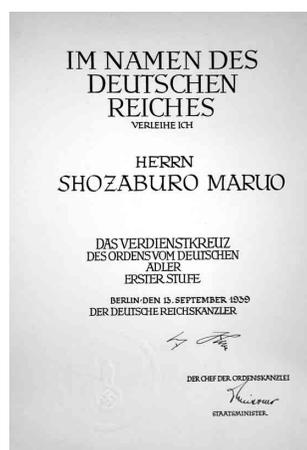


図3 《勲記》
個人蔵・筆者撮影

本古美術展覧会」のことを明記していることがわかる。

2. 2. 勲章とデザイナー

ところで、今回の丸尾彰三郎に与えられた勲章を誰がデザインしたのかは勲記にもまた関連史料や新聞などにも記録はなく、判然としない。ナチス時代の勲章のデザイナーとして、グラフィックデザイナーのエルンスト・クラウゼ Ernst Krause の名があがることもある¹⁵。別の指摘にはヒトラーによると言ったものも見受けられるが、すでに述べたように裏付けのある指摘ではない。

今回の調べによって勲章のデザインが画家で彫刻家、メダル製作者、グラフィックデザイナーのリヒャルト・クライン Richard Klein (1890-1967) によることがわかった。簡単に略歴を見ると¹⁶、リヒャルト・クラインはミュンヘンに1890年に生まれ、1908年にミュンヘン造形芸術アカデミーにおいて、動物の作品を得意としたアンゲロ・ヤンク Angelo Jank と、ミュンヘンの世紀末を代表する古典的な画家フランツ・フォン・シュトゥック Franz von Stuck に師事して絵画を学んだ。その後1919年にはミュンヘンの分離派のメンバーとなり、ナチス時代の1936年にクラインはミュンヘン州立工芸学校を大学に昇格して大学長に就任した。

クラインの作品は、特にナチス時代にナチス党のポスター、ヒトラーの肖像画、ギリシャ神話、女性のヌード、ヒトラーの胸像（立体）、そしてメダルにまで及び、18点（19点のメダルを1点と見なす）が「大ドイツ美術展覧会」に出品され、5作品がヒトラーによって購入されているほどである¹⁷。ミュンヘンのアカデミーでヤンクやシュトゥックに学んだことが、作品には遺憾なく発揮されており、動物をテーマとしたり、人物もギリシャ的な側面に目を向けた作品が制作されている。いずれにせよ重要なことは、伝統的な絵画教育を学んでメダルをデザインする芸術家が担当していたことである。伝統的な教育のシステムとは異なる実用性に機軸を置くバウハウスが20世紀の第一次世界大戦後に台頭してくるものの、それをナチスは弾圧していった。そのような保守的な芸術観に合わせるような芸術家が活躍していたことが、勲章の製作においても確認することができる。

丸尾彰三郎の勲章のデザインに目を向けると [図2]、中央に白色の七宝焼きの十字がある。正十字形で先が二つに割れており、その十字の腕の間にハーケンクロイツを足で抑えた、いわゆる「ドイツ帝国の鷲」が四羽配置されている¹⁸。

このデザインだが、伝統的なフォルムを継承しており、デザインの見本をプロイセン時代に遡る可能性を指摘したい。それはプール・ル・メリット Pour le Meritte 勲章であり [図4]、1740年に騎士として貢献した人物に授与されるかたちでフリードリヒ大王によって制定され、第一次大戦まで叙勲されてきた勲章である¹⁹。ゲーリングやロンメルがこの勲章を受章している。この勲章は、中央に正十字があり、それは薄青色の七宝焼きによるものである。一辺に金色による王冠を伴ったフリードリヒ大王のF、勲章の Pour le Meritte が残りの三辺に金字で書かれている。十字の各辺の間には、鷲が羽を上に向けた姿で配置されている。この構成は今回の丸尾彰三郎の勲章の基本形と合致するものであり、そのため丸尾の勲章における手本のひとつの可能性と捉えることができる。クラインは絵画作品においても伝統的な側面をうまく踏襲していたことを考えれば、今回の



図4 《プール・ル・メリット勲章》
典拠：<https://ja.wikipedia.org/wiki/プール・ル・メリット勲章>

推察の蓋然性は高いと言える。

3 「伯林日本古美術展覧会」とドイツからの叙勲者

さて、この丸尾彰三郎の授与が特別なものか否かについては、丸尾彰三郎の他に同展覧会には多くの関係者がいたことから、それら関係者への叙勲の有無を確認する必要がでてくる。以下にその点を確認する。

1939年の「伯林日本古美術展覧会」に関係した日本人は60名を数えるが、そのうちドイツから授与された者をアジア歴史資料センターのデータベースを調べた結果、14名が該当した。60名に対して14名というのは少ない数と見なすこともできるが、1939年の「伯林日本古美術展覧会」以外の展覧会と叙勲との関係で見ると、たとえば、1931（昭和6）年にベルリンで実施された「現代日本画展覧会」の関係者への叙勲は私見では1名しか見当たらない。「伯林日本古美術展覧会」以外の美術関係で授与されたのは、商工大臣の藤原銀次郎であり、美術を通じて日本文化をドイツに紹介し、両国の親善に寄与したことが受勲事由とされている。これは、ベルリンの「伯林日本古美術展覧会」後の同年9月に「現代日本画展覧会」を開催したのちに作品をドイツに贈呈し、代表としてこれを導いたことを意味している²⁰。そのため美術展に関して14名もの関係者が授与されているのは大変珍しく、多い数値と理解される。

では「伯林日本古美術展覧会」の14名の具体的に当時の立場を含め勲章の等級順に見ると、最も勲章の高い等級は「グロース・クロイツ・アードレル勲章（大ドイツ鷲勲章、以下、ドイツ語のカタカナ表記は受勲記の記載のまま）」であり、それを受章されたのは、当時首相だった平沼麒一郎である。この勲章は展覧会の関係者では平沼一人であり、他の日独防共協定での業績では、没後に山本五十六が授与された勲章でもある。次に高い等級は「フェルディーンストクロイツ・ミット・デム・シュテルン・アードレル勲章（ドイツ鷲騎士団功労星勲章）」だが、これを授与されたのは三谷隆信（外務省条約局長）、松尾長造（文部省宗教局長）、三井高陽（男爵）、井上三郎（侯爵）、細川護立（侯爵）、友枝高彦（東京文理科大学教授）、福井利吉郎（東北帝国大学教授）の7名であった。井上三郎は文化使節として渡独している。三井高陽と細川護立は所蔵作品を提供している。友枝高彦は委員の一人であったが、日独関係者としての評価と見なせる。美術史の専門家として最高の勲章を得たことになるのが福井利吉郎である。

次に等級の高い勲章が、丸尾彰三郎が授与された「フェルディーンストクロイツ・エルステル・シュトゥーフエ・アードレル勲章（ドイツ鷲騎士団功労勲章一等）」である。美術史家兒島喜久雄（正5位勲5等）も授与されていた。兒島喜久雄は実行委員であったことと、文化使節井上三郎の随員として尽力したことが授与の理由とされた。このときに兒島喜久雄はまだ東大の助教授だったことで、福井利吉郎よりも一段低い勲章の受章になったと推察される。

さらに続くのが、「フェルディーンストクロイツ・ツワイテ・シュトゥーフエ・アードレル勲章（ドイツ鷲騎士団功労勲章二等）」である。秋山光夫（帝国博物館監査官）、青戸精一（文部書記官）の2名であり、それに次ぐのが「フェルディーンストクロイツ・ドリッテ・シュトゥーフエ・アードレル勲章（ドイツ鷲騎士団功労勲章三等）」で、亀田孜（帝国博物館監査官補）、山田智三郎（美術研究所嘱託）の2名である。山田智三郎は井上三郎に随員して渡独し、日独親善に貢献したことが授与理由に挙げられている。

このように、1939年の「伯林日本古美術展覧会」では、14名の関係者がドイツ側から勲章を授与されていた。そのうち美術関係者には、丸尾彰三郎の他、浮世絵の専門家である福井利吉郎、西洋美術史を専門とする兒島喜久雄、秋山光夫（帝国博物館監査）、亀田孜（帝国博物館監査官

補)、法隆寺の保存事業に関わった青戸精一(文部書記官)²¹、ドイツでバロックの博士論文で学位を取得した山田智三郎(美術研究所嘱託)の6名が認められた。丸尾彰三郎よりも等級の高い勲章を授与されたのは、東北帝国大学教授の福井利吉郎だけであり、丸尾彰三郎は美術関係者のなかでは、2番目に高い勲章を授与されており、他の関係者よりも高く評価されたことが理解できる。

この14名だが、展覧会の役職から見ると、ドイツと関連する名誉委員会の委員長である井上三郎と、名誉総裁の平沼麒一郎が選ばれていることがわかる。

丸尾彰三郎を含めた美術関係者7名のうち、日本委員会の委員であった青戸精一を除くと、日独双方をメンバーとした名誉委員会の下に置かれた実行委員会のメンバーであり、かつ日本側で設立された実行委員会のメンバーを兼ねていたことがわかる。

残りの外交官の三谷隆信(外務省条約局長)、文部官僚の松尾長造(文部省宗教局長)、三井高陽(男爵)、細川護立(侯爵)、友枝高彦(東京文理科大学教授)だが、三井高陽と細川護立は展覧会に作品を展示し、細川護立はさらに日本委員会の顧問の立場にあり、三井高陽は日本側の日本委員会の委員であった。友枝高彦は長年のドイツとの緊密な関係があったが、日本側の日本委員会の委員であり、また実行委員の一人として認められる。三谷隆信と松尾長造に関しては、日本委員会の委員であったことが確認できる。

これら丸尾彰三郎を含めた14名は、1939年の「伯林日本古美術展覧会」への貢献として勲章が授与されており、その点で注目されるだろう。

その際に同展覧会で受章された勲章の階級に注目すると、美術関係者以外の官僚たちのほうが高い傾向がある。おそらくそこにドイツ側の叙勲の理由が露呈していると言える。つまり、美術展でありながら、政治的な側面が重視されている可能性が指摘できるのである。

4 「伯林日本古美術展覧会」と授与されなかった者

ここに見落とせない事実がある。「伯林日本古美術展覧会」の実施に最も深く関わった人物と言える美術史家矢代幸雄に、勲章が授与されていないのである。

すでに別稿で述べているように、矢代幸雄は、日本側の実行委員のひとりでもあり、「伯林日本古美術展覧会」の実施において重要な情報を、ドイツ側の実質的な実行委員の長だったオットー・キュンメル Otto Kümmel に適切な時期に助言をしていた。このことが功を奏して展覧会の実施につながった面がある²²。

ところが、その活躍は叙勲の対象にはならなかったのである。さらに矢代幸雄の当時の所属は美術研究所長だったが、同じ美術研究所嘱託だった山田智三郎は等級が低いものの勲章を授かっていた。どこか奇異な印象を得るのも仕方がない。

実は矢代幸雄はすでに1930(昭和5)年1月8日にドイツ国赤十字社から同社名誉賞第二等を授与されていた²³。ドイツ国赤十字名誉賞章証訳文によれば、「矢代幸雄教授の赤十字社に対する深き功績を認め、独逸国赤十字社の謝意としてドイツ国赤十字社名誉総裁大統領大元帥フォン・ベネッケンドルフとフォン・ヒンデンブルク」より授与されている。受領事由書で矢代幸雄は、その受領について、美術上の日独国交に微力ながら尽力したと記されている。赤十字社の活動は紛争、災害、病気の救済において行われるという認識が一般的であり、また戦争と平和への貢献が授章の理由とされるが²⁴、寄付や寄贈が授章に大きな意味を持つとする関直子氏の指摘を踏まえると、今回の矢代幸雄の勲章は、矢代が深く関係した「現代日本画展覧会」に出品した作品は、ドイツ側に寄贈されており、それが平和への貢献として文化的な交流も評価されたと

推察される²⁵。

このように矢代幸雄がヒトラーから勲章を受章されることがなかったのは、すでに授与されていたという事実がその背景に存在する。ただし、筆者はさらにその要因に加えたいことがある。というのは、勲章は再叙勲があるとされるからである²⁶。矢代幸雄が授与されたのは、ドイツ国赤十字社の勲章であり、ヒトラーからの外国人への褒章とは異なることも留意される。そのため、矢代幸雄が授与されなかったことを政治的な側面から見ることを提示したい。矢代幸雄は欧州に留学してバーナード・ベレンソンとの師弟関係があるものの、ローレンス・ビニヨンや、アーサー・ウェイリーなどの英国人との知遇を得ており、バーナード・ベレンソンの下で初期ルネサンスの画家ボッティチェリをテーマにしてまとめた書物をロンドンで1925年に刊行していた²⁷。つまり矢代幸雄は欧州のなかでは英国と密接な関係を持っていたことにより、ドイツ側からすると、敵国英国側の人物と見なした可能性が考えられるのである。

矢代幸雄本人は戦後になって、ドイツ国からの受勲者たちに対して大層皮肉を込めたコメントを残していた。『日本美術の恩人たち』のなかで、「・・・日本から代表団及び随員が大勢出かけたが、ヒトラー自身その開会式に臨場し、日本から行つた人々は大きな勲章を頂戴して頗る之を光栄として、帰国後、東京の宮城前に行われた紀元二千六百年の祝典に、ヒトラーから貰つた大きな勲章をつけて興奮して早朝から出席した人もあった、という噂も聞いた」と書き留めて、さらに「今となつてはすべて悪夢のような戦争行進曲的一幕に他ならないが・・・」といった否定的な言葉を続けている²⁸。戦後の記載のためか、そこには展覧会に対する自らの貢献についての記載はなく、矢代幸雄がナチス時代に積極的に関与したことを闇に葬る矢代幸雄のしたたかさが見受けられる面もある。とはいえ、ナチス期のドイツ側では、矢代幸雄の優れた貢献を知っていたはずであったが、勲章を矢代幸雄に授けることはなかった。勲章を授与された者たちと比較すれば、矢代幸雄が勲章を授与されなかったことは留意される事例と言える。

5 日本側からの叙勲との関係

展覧会の重要な関係者でありながら、叙勲がないという例は、日本側からのドイツ側への叙勲からも把握できる。

ベルリンの「伯林日本古美術展覧会」に関しては、日本側からもドイツ側の関係者に勲章が贈られていた。今回の調べでは昭和16年3月という展覧会開催から2年後の9名が該当する²⁹。叙勲の理由は、ベルリンの「伯林日本古美術展覧会」によって中国の模倣とされてきた評価を訂正し、「日本精神を鼓吹し日本文化に対する正当なる理解と尊崇を加え」日独を一層密接にした貢献による。文部大臣ルストと、文部次官で党内の地位がルストと同等のヴェルナー・チンチュ（日本の書類上の記載はチンチ）が勲一等瑞宝章を、外務省公使館参事官トワルドスキーと、実行委員でドイツ国特命全権公使元外務省文化事業部長スチーヴェが勲二等瑞宝章を、外務省文化事業部東亜係長ロートとドイツ国立博物館事務総長ギーリヒが勲三等瑞宝章を、プロシア国立博物館東亜部長で実行委員のライデマイスターが勲四等瑞宝章を、所属が特になく、この展覧会の実行委員のストラハウイックと、同じく所属がなくドイツ国立博物館日本古美術展覧会係官の肩書のフォン・ホルストが勲五等瑞宝章を授与された。これら9名のうち、5名は展覧会の委員会に関わっており、ルストが名誉委員で、それ以外の4名は実行委員であった。興味深いのは、実行委員会の美術関係者はライデマイスター一人しかいないこと、また残りの4名は展覧会の委員会に所属していないものの、展覧会に貢献したとして勲章が授与されていたことである。後者の4名はいずれも官僚であり、また委員会には関わらなかったチンチュへの等級選択において、党

内での地位が参考にされてルストと同じく受勲で最も高い勲一等瑞宝章を授与されていた。

この日本側からのドイツの受勲者を見ると、主に外務省と文部省の官僚が選ばれていることに気づく。ドイツ側からの日本人の受勲者と比較すると、展覧会の名誉総裁だった首相平沼が授与されているので、日本からはドイツ側の名誉総裁だったゲーリングにも授与すべきだったが、実際にはされていない。代わってドイツの内閣のなかから授与のトップに据えられたのは、文部大臣ルストであった。あるいは別の事例を見ても日独の授与対象者の対応にずれが生じていることがわかる。ドイツの名誉委員会の会長には外務大臣のリッベントロップが就任し、日本側は井上三郎であったが、井上三郎はドイツ側から授与されているのに対して、リッベントロップは授与されていない。

このように日本側とドイツ側では対等のかたちで叙勲が実施されていないことがわかる。また、チンチュヤフォン・ホルストは美術展への貢献を理由に日本側から勲章を授与されているが、二人はそもそも委員会のメンバーでなく、また具体的なレベルでの貢献も認められない。チンチュは文部次官でもあり、そうした立場が優先された可能性がある。

こうした勲章叙勲の状況を踏まえると、日本側はルストやチンチュなどの官僚の多くに勲章を与えており、美術関係者はライデマイスターだけに限定されているのに対して、一方のドイツ側は、平沼をはじめ、官僚に勲章を多く与えつつ、実際に実行委員会に関わった美術関係者にも授与されていたことがわかってくる。つまりそのことが意味するのは、ドイツ側は、本来政治的な意味を持つ勲章を、美術関係者にも与えることで、展覧会の意味を政治的な方向へと舵を切っていたと理解しうる。それに対して日本側は、返礼の立場から、もともと政治的な象徴である勲章を、そのままドイツ側の政治関係者に授与していた。そのために美術関係者がわずかに一人に授与しただけにとどまると把握される。もともとドイツ側からの叙勲においても、美術関係者よりも官僚に高い勲章を与えていたことによっても、合わせてこの見方を裏付けたい。

小川賢治氏は、叙勲が万人に対して平等でなく格差を伴っており、国家が潜在的に有する価値付与行為と指摘する³⁰。勲章の授与は、国家の権威への支持を強め、国家の統合を強化する役割を持っており、授与される対象は国家の特性を具現していると言う³¹。このようにヒエラルキーを持った勲章に注目するならば、ヒトラーは「伯林日本古美術展覧会」において、勲章の役割を遺憾なく発揮して美術関係者にも勲章を与えることで、本来は文化的な役割を担う「伯林日本古美術展覧会」を、政治的な行事として評価される立場に置き換えたと理解されるべきであろう。

おわりに

丸尾彰三郎の遺族である佐倉瑞穂氏より提供を受けた遺品の勲章に注目することで、1939年にドイツのベルリンで開催された「伯林日本古美術展覧会」の政治性を改めて確認した。丸尾が受章した勲章を概説し、そのデザインを担当したのがアカデミックな画家でもあり、ヒトラーに気に入られた芸術家のリヒャルト・クラインである特定を行った。そのうえで、丸尾が勲章を授かったことから「伯林日本古美術展覧会」に関わる人物と勲章の受賞の事実を調べ、その意味を検討した。

その結果、「伯林日本古美術展覧会」に関係した日本側の美術関係者の多くはドイツ側から勲章を授かった一方で、日本側は官僚に勲章を与えており、ドイツ側からの勲章とのバランスにはずれがあったことがわかった。それは何を意味するののかと言えば、勲章はもともと政治的な意味を持つものであり、ドイツ側はその役割を持つ勲章を美術関係者にも受勲することで、「伯林日本古美術展覧会」を文化交流でなく政治的意義を強調したかったと見なすことができた。一方の

日本側はドイツ側からの返礼であり、勲章の政治性を踏まえて官僚に授与していたのである。

このことより改めて「伯林日本古美術展覧会」をドイツ側はあくまでも政治的な行事として捉えていた可能性の高いことが裏付けられる。

佐倉瑞穂氏（遺族）および関直子氏（早稲田大学教授）、増野恵子氏（早稲田大学講師）には改めて資料や情報提供をいただいたことに重ねて感謝申し上げます。

欧文要旨

Shozaburo MARUO (1892-1980) war der Kunsthistoriker mit dem Thema "Geschichte der Skulpturen in moderne Japan und tätig als Nationaler Rechtsinspektor. Mir wurde von seiner Hinterbliebene Familie Mizuho SAKURA die Relikten einschließlich eine Medaille und ihre Satzung angeboten. Die politische Absicht der Ausstellung "altjapanischer Kunst Berlin 1939" wurde dadurch untersucht, was die Medaille von Hitler für diese Ausstellung bedeutete.

- 1 丸尾彰三郎「日本美術年鑑所載物故者記事」（東京文化財研究所）<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10243.html>（閲覧2021年11月26日）
- 2 拙書『ナチス・ドイツと<帝国>日本美術 歴史から消された展覧会』吉川弘文館、2016年、42-51頁。
- 3 欧州で高い評価を受けていた浮世絵は肉筆に限定され、たとえば北斎の作品は肉筆画《雪中美人図》が展示された。また作品を補足するかたちで能面、能衣装なども出品された。
- 4 拙書（注釈2）を参考。
- 5 https://de.wikipedia.org/wiki/Ausstellung_Altjapanischer_Kunst_1939（閲覧2021年12月4日）
- 6 拙書（注釈2）、88-127頁。
- 7 「勲章 Wikipedia」<https://ja.wikipedia.org/wiki/勲章> 佐藤正紀『勲章と褒賞 この一冊で、すべてがわかる』時事画報社、2007年。三省堂企画編修部編『叙勲・受賞のてびき 勲章・褒章事典』三省堂、2001年。この資料は増野恵子氏の提供による。
- 8 草森紳一『絶対の宣伝 ナチス・プロパガンダ3 煽動の方法』文遊社、2016年、75-93頁。
- 9 後藤謙治『ヒトラーと鉄十字章—シンボルによる民衆の煽動—』文芸社、2000年。
- 10 たとえば、ヒトラーが一級ドイツ勲章をデザインしたと文献にもあると記載しているが、その文献の記載はなく、またライヒスアドラーのデザインは、建設大臣となったアルベルト・シュペーアによると指摘されているが、その裏付けがない。後藤謙治『ヒトラーと鉄十字章—シンボルによる民衆の煽動—』文芸社、2000年、50-51、60-6頁。
- 11 小川賢治『勲章の社会学』見洋書房、2009年、154頁。同様の指摘としてロジャー・ムーアハウスの『図説モノから学ぶナチ・ドイツ事典』で、ヒトラーの政権に関わるモノのなかに「母十字勲章」が取り上げられている。これは四人以上の子供を持ち、アリア人の女性に授与されたものであり、「事実上、ドイツ人女性の子宮の政治利用」として、ドイツの勲章のきわめて政治性の強いことを明記している。ロジャー・ムーアハウス『図説モノから学ぶナチ・ドイツ事典』千葉喜久枝訳、創元社、2019年、159-161頁。
- 12 小川賢治前掲書（注釈11）、143、146頁。
- 13 「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A10113314600、陸軍軍医中将小泉親彦外二十四名外国勲章受領及佩用ノ件（国立公文書館）」（閲覧2021年11月26日）
- 14 遺族の手元には丸尾が亡くなった1980年7月24日の葬儀の際の慶應義塾大学西川よりの弔辞が残されており、その弔辞においても、渡独したことに触れている。昭和16年の春の思い出で、その頃の丸尾は、「ドイツで開かれた日本古美術展に随行した直後で、地味なうちにもおしゃれな一面さえお見受けできたところ」と書き留められている。
- 15 https://de.wikipedia.org/wiki/Medaille_Winterschlacht_im_Osten_1941/42（閲覧2022年1月4日）。
- 16 Hrsg.v. Hans Vollmer : *Allgemeines Lexikon der bildenden Künstler des 20. Jahrhunderts*, Band. 3. Leipzig,

- 1999, S. 60. Hrsg.v. Andreas Beyer u.a. : *De Gruyter Allgemeines Künstler-Lexikon, Die Bildenden Künstler aller Zeiten und Völker*, Band 80, 2014, S. 419. Horst Ludwig u.a. : *Münchner Maler im 19. Jahrhundert Band 2, Bruckmanns Lexikon der Münchner Kunst*, München 1982, S. 242-245. 拙論「ナチス時代の体制派美術の問題（1）ドイツ美術展に女性の裸体画を出展した画家の経歴について」『別府大学紀要』第62号、2021年、5頁。
- 17 中央美術史研究所の大ドイツ美術展出品作品のデータベースを参照のこと。 <http://www.gdk-research.de/>
- 18 ロジャー・ムーアハウス、前掲書（注釈11）、195-196頁。ムーアハウスによれば、ドイツ第三帝国の鷲をデザインしたのは、彫刻家クルト・シュミット＝エーメン（Kurt Schmidt-Ehmen 1901-1968）とされる。かれはライプツィヒ・アカデミーではアドルフ・レーネルトに、ミュンヘンのアカデミーでは、ベルンハルト・プレーカースのもとで学んでいる。
- 19 Orden und Ehrenzeichen. https://de.wikipedia.org/wiki/Orden_und_Ehrenzeichen#Verdienstauszeichnungen（閲覧2022年1月2日）。他にもバイエルン王国の勲章（Verdienstorden der Bayerischen Krone Ritterkreuz）も類似したデザインを見せている。Krone und Verfassung, König Max I. Joseph und der neue Staat München 1980, S. 188.
- 20 『読売新聞』「藤原翁のお土産 独政府へ造営式」1939年11月28日。『読売新聞』「勲章貰って藤原さん満悦 ヒ総統から大十字鷲」1940年4月2日。
- 21 文部省化学局調査課長となり、法隆寺の保存事業に尽くした。明治35年島根県に生まれ、昭和2年東大法学部政治科を卒業ののち、東大農学部大学院に入り農政学を納めている。昭和4年に文部省に入局して、最終的に文部省科学局調査課長となり、43歳で亡くなっている。文化財研究所データベース <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8723.html>（閲覧2021年12月8日）出典『日本美術年鑑』昭和19-21年版、94頁。
- 22 拙書（注釈2）、78-80、88-127頁。
- 23 「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B02031513700、8 昭和5年1月8日から昭和5年2月27日（A-6-0-0-1_6_1_001）（外務省外交史料館）」。
- 24 小菅信子『日本赤十字社と皇室 博愛か報国か』吉川弘文館、2021年、19-27、117-119頁。赤十字はさらに平和な活動に対して勲章を与えるとの指摘もある。 [https://de.wikipedia.org/wiki/Rote_Kreuz-Medaille_\(Preußen\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Rote_Kreuz-Medaille_(Preußen))（閲覧2021年12月30日）。
- 25 赤十字との関係は今後の課題とする。
- 26 三省堂企画編集部編『叙勲・受賞のてびき 勲章・褒章事典』30頁。（注釈7）
- 27 稲賀繁美『矢代幸雄 美術家は時空を超えて』ミネルヴァ書房、2022年。
- 28 矢代幸雄『日本美術の恩人たち』文芸春秋新社、1961年、134頁。
- 29 「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A10113403300、簿冊表紙・目次等（国立公文書館）」。
- 30 小川賢治前掲書（注釈11）、2-3頁。
- 31 小川賢治前掲書（注釈11）、7-8頁。